庭園の構想に関する研究No.22 華嚴経と円通寺庭園の構想について

A Study of Garden Vision No.22
The Avatamsaka Sutra and Garden Vision in Entsuji temple

澤 田 天 瑞
Tenzui Sawada
澤田庭園研究所

Key Words

1. 円通寺庭園
Entsuji Garden

2. 庭園の構想
Garden vision

3. 補陀洛山
Mt. Potalaka

1. 研究の目的と方法

本研究は、京都市左京区岩倉幡枝町地内にある臨済宗妙心寺派大悲山円通寺庭園の作庭構想と、作庭時期につき、盤陀石から着想を得て「大方廣仏華嚴経」と「妙心寺史」¹⁾、「普照国師年譜」²⁾などに基いて、思想的に解明しようとするものである。

2. 寺の沿革と庭園の概要

円通寺は洛北幡枝の妙泉寺の旧跡に、妙心寺の禿翁妙周が、菩提院という一庵を結んでいたのを、慶安四年(1651)に後水尾上皇が山荘を設けて幡枝御殿とされたことにはじまる。その後、霊元天皇の乳母円光院文英尼が、幡枝御殿を賜り、臨済宗妙心寺派の寺に改めた。

庭園は仏殿の東庭で、南北に長く、面積は約六百六十平方米(約二百坪)。比叡山を借景とした枯山水の平庭。東北隅に枯滝口を設け地盤は西部の仏殿へゆるやかな下り気味。

深々とした杉苔の中の庭石は、いずれも低く散開しているように見えるが、立石と臥石とが巧みに組合っている。

3. 庭園の要旨

円通寺庭園は、「盤陀境」という庭園を、当山開基円光院文英尼が、明暦年間(1648~1651)に妙蓮寺の玉瀾坊

に改修を依頼し、「華嚴経」から庭園の主題を「如来の正覺」、構想は「無限の求道」、構成は「補陀洛山」とし、観世音菩薩の霊場を表現した臨済宗の禅林庭園であると考察する。

4. 庭園の主題

本庭園の主題である「如来の正覺」は「華嚴経、世間淨眼品」につぎの如く説く。

「如来处此宝師子座。於一切法成最正覺。了三世法平等智身。普入一切世間之身。妙音遍至一切世界。不可窮盡。猶如虛空。平等法相智恵行處。猶如虛空。等心隨順一切衆生。其身遍坐一切道場。悉知一切衆生所行。」(國譯大藏経第五卷P1)²⁾

(大意)

如来はここで最高の悟りを開かれた。そのことを経文はつぎのように説いている。

仏は、この師子座に坐って、最高の悟りを完成されたのである。仏は過去、現在、未来の真理がすべて平等であることを悟り、その知恵の光は、すべて人々の体の中に入り、その妙なる悟りの音声は、世界のすみずみまで鳴りひびいている。

つまり仏の悟りは、仏自身だけの問題ではなく、全世界を浄め、全世界を照明しているという点に、その真意が存するといえる。悟りの世界とは、われわれのこの世

界を離れた特別の境地を指しているのではない。この全世界の莊嚴であり、全世界の実相なのである。

5. 庭園の構想

本庭園の構想である「無限の求道」は「華嚴經、十地品第二十二之一」につぎの如く説く。

「十地者是一切佛法之根本。菩薩具足行是十地。能得一切知恵。」(国譯大藏經第六卷P.66)²

(大意)

華嚴經の中でも、最も重要な地位を占めるのは十地品である。菩薩の修行の深まる過程を段階的に説いたものが十地品である。仏の神通力を受けた金剛藏菩薩は、はじめて十地について説き明かした。

十地とは「菩薩摩訶薩智地有十、過去未來現在諸仏已説今説當説。為是地故。我如是説何等為十。一曰歡喜。二曰離垢。三曰明。四曰燄。五曰難勝。六曰現前。七曰遠行。八曰不動。九曰善慧。十曰法雲。是十地者。三世諸仏已説今説當説。我不見有諸仏国土。不説是十地者。何以故。此十地是菩薩最上妙道。」(国譯大藏經第六卷P.65)²

(大意)

そこで金剛藏菩薩は、解脱月菩薩の要請に答えて十地について明かした。十地とは(1) 觀喜地、(2) 離垢地、(3) 明地、(4) 燄地、(5) 難勝地、(6) 現前地、(7) 遠行地、(8) 不動地、(9) 善慧地、(10) 法雲地である。

初地では広大な願を発し、第二地では戒を保ち、第三地では禪を修し、第四地では専一に道行を修し、第五地では方便の知恵を磨き、第六地では甚深の因縁を知り、第七地では広大な心を修し、第八地では世間を莊嚴する神通力を発し、第九地で智恵の光で一切を照し、第十地に於て諸仏の大法の雨を受けるというのである。

十地の実践が仏を生み出す根本であると同時に、それ自体が仏の智恵から生れたものである。

「爾時文殊師利。如象王廻。觀善財童子。作如是言。善哉善哉。善男子。乃能発阿耨多羅三藐三菩提心。求善知識親近善知識。問菩薩行求菩薩道。善男子。是為菩薩第一之藏。具一切智。所謂求善知識。親近恭敬而供養之。是故善男子必求善知識親近恭敬。一心供養而無厭足。問菩薩行。云何修菩薩道。云何滿足菩薩行。云何清淨菩薩行。云何究竟菩薩行。云何出生菩薩行。云何正念菩薩道。云何縁於菩薩境界道。云何増廣菩薩道。云何菩薩具普賢行。」

(国譯大藏經第七卷P.64)²

(大意)

よろしい、よろしい。君よ、よくぞ無上の悟りへの心を発し、善き師を求め、善き師に近づき、菩薩の実践について尋ね、菩薩の道を求めようとされた。君よ、これが菩薩の第一の藏であり、(これには仏の) 一切を知る智恵が具っている。

すなわち、善き師を求め、近づき、敬い、供養するということが、それであるから、君よ、善き師を求め、近づき、敬い、一心に供養しつづけて、菩薩の実践について尋ねるがよい。どのように菩薩の道を修め、どのように菩薩の実践を完成し、どのように菩薩の実践を浄め、どのように菩薩の実践を究め、どのように菩薩の実践を生み出し、どのように菩薩の道を正しく念じ、どのように菩薩の境地のあり方にかかわり、どのように菩薩の道を充実発展させ、どのように菩薩は普賢の実践を身につけるのかと。

つまり文殊利が善財童子の正しい悟への心を発したことを讃え、善知識を訪ねて菩薩の実践について詳しく問うべきことを教え、無限への究道を説いている。

このような菩薩の精神が、華嚴經の最後の章「入法界品」の中でえがかれている。菩薩が仏になるように努めていくことは、実は仏の中で、仏に催され、うながされて、しかも果しなく道を求めていくことである。菩薩の求道は、仏の世界の実現であり、自利(自から究極の自覚を求む)。利他(人々をして目覚ましめる)の二行の実践である。従って、衆生が存在する限り、菩薩の求道は果てることがない。それは、仏の世界を実現してやまない「無限の求道」である。

6. 庭園の構成

本庭園の構成である観音菩薩の聖地「補陀洛山」は、「華嚴經第十卷入法界品」につぎの如く説く。

「善男子。於此南方有山、名曰光明、彼有菩薩。名觀自在。汝詣彼間。菩薩云何。学菩薩行。修菩薩道。時善財童子頭面敬禮彼長者足。遶無數市。眷迎觀察。辞退南行。

漸漸遊行至光明山。登彼山上周偏推求。見觀世音菩薩住山西阿。處處皆有流泉浴池。林木鬱茂地草柔軟。結跏趺坐金剛宝座。無量菩薩恭敬圍遶。而為演説大慈悲經。普攝衆生。見已。歡喜踊躍不能自勝。合掌諦觀目不暫瞬。

作如是念。善知識者則是如來。善知識者一切法雲。善知識者諸功德藏。善知識者十力妙寶。善知識者難見難遇。善知識者無盡智藏。善知識者功德山王。善知識者開發示導一切智門。能令一切入薩婆若海。究竟清淨無上菩提。」(國譯大藏經第七卷P.113~114)²

(大意)

善財童子は安住長者から、つぎのように教えられた。この南方の海上に山がある。光明山という。そこに菩薩がおられて観世音という。

そこで善財童子は光明山に登り、観世音菩薩を尋ねた。観世音菩薩は光明山の西の丘にある宝座の上に、結跏趺坐しておられた。光明山には泉が湧き、池があり、樹木が茂り、地面は柔らかな草で覆われており、まさしくこの世の極楽のような風景であった。観世音菩薩はここで大慈悲經をお説きになっていた。観世音菩薩は弘誓の願をおこしておられた。その願いとは、一切の衆生を救うことである。一切の衆生のさまざまな恐怖や憂いを、すべて取除いてやるという願いである。

善財童子は善知識は慈母なりと改めて認識した。善知識は見難く、遇い難いことを嘆きながら、さらに善知識を求めるべく決意する善知識こそ菩提であり、精進であり、不可壊の力であることを確信するに至った。

たった自分だけで修行し、道を求めることは難しい。ともすれば挫折したり、怠惰になってしまう。しかし、善知識に会ったり、善知識を見たりすれば、勇猛心が湧きでて、心気、力が一体となってやる気が起ってくるものである。善知識を訪ね、教えを乞うに当り、善財童子は改めて、さらに続いて善知識を訪ね、教えを授かる決意を新たにした。

7. 考察

禅宗と華嚴經との関係

華嚴經は、詳しくは大方廣仏華嚴經といい、般若經に次いで現われた初期大乘經典中の代表的な經典である。本經には四十卷本と六十卷本、そして八十卷本とがある。六十卷本は華嚴宗所存の經典で、八十卷本の偈頌は禅宗で依用される。(禅宗辞典P.267)⁵

華嚴經の重要部分は「十地品」と「入法界品」である。「十地品」は菩薩の修行の深まりの境地を段階的に説いたもの。仏の神通力を受けた金剛藏菩薩がはじめて十地に

ついて説き明した。十地とは(1) 歡喜地、(2) 離垢地、(3) 明地、(4) 發地、(5) 難勝地、(6) 現前地、(7) 遠行地、(8) 不動地、(9) 善慧地、(10) 法雲地。

「入法界品」とは、善財童子の求道物語を説いたもの。華嚴經の最後の品で、善財童子が菩提心を発して五十三人の善知識を歴訪し、その教えを受けて修行を完成して、ついに悟りを開くプロセスが記述されている。

円光院文英尼と円通寺

円光院は、贈左大臣園基任の第三女で、後光明天皇の生母壬生院基子の姉に当る。幼少の頃から後水尾天皇の生母中和院前子(近衛前久の女)に侍し、長じて出雲松江城主京極忠高(若狭守、所領26万4千700石余)に嫁した。

寛永十四年(1637)6月、夫忠高の死後、円光院は再び京都に帰り、仙洞に入って宮嬪となった。承応三年(1654)、後水尾上皇の皇子識仁親王(後の霊元天皇)の御乳母となり、幡枝山荘で皇子傳育を申上げたが、御手放れの後には仏教に深く帰依され、近江永源寺の一条文守(仏頂国師)の法門に参して文英の道号を得たが、一条の寂後は妙心寺の愚堂国師に就いて宗要を開き、愚堂国師も屢々幡枝の山荘で法門を披いた。「宝鑑録」に「愚堂文英に与うるの偈」として「洛北円光主菊潭英公禅尼常以晨灯夕香、奉仏施、僧為生業、其志実可嘉尚者也。一日招、予賜茶、茶話之次見求拙辞、境中有灵石、名其処、日盤陀境、仍遺一偈云、施僧奉仏 永結聖縁、英公願力、興石齐堅。」(妙心寺史P.566)²

円通寺庭園は、元來が借景庭園ではなく、大木の生い茂っていたことが「霊元法皇御宸記」でうかがうことができる。

「靈元法皇御宸記」には「前略。庭は昔見しにかわらで、誠に寺めきたる植木大木の松などあり、云々」(妙心寺史P568)³

円通寺庭園が借景庭園として広く紹介されたのは、天明七年(1787)に出版された「拾遺都名所図会」で、「すべてこの地の庭造、小堀遠州の好にして、東の方より比叡山を庭中へ採り、奇景眞妙にして、盤陀石という名石あり。云々。」(日本名所風俗図会8京都の巻2 P316)²²

その後愚堂国師が山科に退隱するに及び、更に禿翁妙周の室を叩いて悟後の生涯を検参していた。

円光院はこの幡枝山莊を公認の寺とすることを志し、後水尾上皇から「大悲」の山号と「円通」の寺号の宸筆を賜り、寛文十一年(1671)に、本尊として香木製の観音像の開眼供養を隠元が行なっている。しかし、当時幕府は新寺創建を許可しなかった。

約三十年後の延宝六年(1678)、輪王寺宮守澄法親王の肝煎で、寺としての公認が許可された。同八年、後水尾上皇は崩御され、文英尼も患い、寺の将来を案じていた時、靈元天皇は宸翰を賜り、文英尼を慰められたが、延宝八年(1680)十一月に世を去られ、師の禿翁も翌年に示寂した。

禿翁は生前円通寺永普の後見をしていたがこれを法姪の妙心寺通玄院二世松翁に托して去った。松翁は只管永普を輔佐して円通寺の興隆を計り、執事性通も寺の経営に任じ、雲上尊貴の御隨喜によって潮音堂を新設し、三十三体の観音像を安置して、盛大なる法会供養を営んだ。

円光院文英尼と隠元との関係

承應三年(1654)隠元が明末の騒乱を避けて来朝し、明暦元年(1655)後水尾上皇対御の為の法衣を、円光院文英が製して隠元に贈っている。「金針玉線綴紅霞、掩映無聊老倒家、揜着通身渾是眼、殿光影裡驗龍蛇、円光院文英自製法衣為供以偈贈之 隠元」³(妙心寺史P.567)³なる一偈を寄せて謝意を表している。

明暦元年、普門寺に隠元を訪れ父母の供養を請じている。「普録」に「薦慈嚴請上堂云、円光院文英夫人為薦父雲嚴母正受齊請上堂云」(普照国師年譜巻下P544)

さらに翌年春、妹の壬生院大妃の供養も隠元に請うている。「普門録」に「円光院求薦壬生院皇太妃」(新纂校訂隠元全集P.5227)⁴

寛文十一年(1671)、隠元は禿翁等同志の斡旋によって京都に入り、幡枝の山莊に於いて円光院から師資の礼を受け、栴檀製の観音像の開眼供養を営んでいる。その時、二条摂政政康の室貞子(後陽成天皇の皇女)が観音の開眼を隠元に求めたのも、円光院の斡旋によるものといわれている。

隠元禪師と補陀洛山との関係

隠元禪師は行方不明の父を捜すため、観音のご利益にすがりよりほかないと思い、二十三才の春、便船に乗っ

て南海の普陀山（普陀洛山）に赴いた。観音の霊場普陀山は、舟山列島中の一孤島で、当時三大霊場の一つとして信仰されていたところ。

普陀山は羅漢、塔子、弥陀、靈鷲、妙応、白衣、観音、光熙などの諸峰が聳え、仏手岩、玄通岩、東方岩、獅子岩、象岩、香炉岩、童子岩、巫山石、仏牙石、無畏石、盤陀石などの奇岩怪石に富み、別天地をなしていた。

普陀山を訪れた隠元は、仏地の殊に勝れ大いに俗世間と異なっているのを見て、俗念が一時に消え去り、ついに発心して潮音洞主に入門し茶頭となった。潮音洞主から、この仏子は眞に菩薩の使者であると喜び、かつ歎ぜられたという。一年間茶頭を勤めたが、やがて感ずるところがあって二十四才のとき、故郷に帰って出家した。（人物叢書隠元 P.9～11）⁶

このように隠元は普陀山を巡拜し、潮音洞大士の前で発心し、三宝を正信した意義ある旅であった。

円光院死後覚書の中に

「きんの中より、御きたうの御ため、又こしん（親）わかさのかみ（若狭守）殿、菩提のため、一寺とりたて申たきと、日比のねんぐわんに候へつる。きんねん（近年）しんち（新地）ちゅう（自由）になりがたきやうすにて候へどお、此ち（地）の事は日光御もんぜき様（日光門跡、輪王寺宮母）御とりもちにて、とだゑちぜんのかみ（戸田越前守）殿へ、よく仰つかはされ候、ゑちぜんのかみ殿より江戸しう中へ、くはしく御申くだされ候。中略。こうぎ（公儀）しゅびよく（首尾能）あいとゝのひ、とし月のねんがん（念願）かなひ申候事。くわんぜおん（観世音）ひとへに御りしやう（利生）と、ありがたく思ひ申候事。つきしがたく候。」（妙心寺史 P.566）³

当時、新寺の建立は幕府の政策として相容れなかった為、殆んど三十年間の問題となっていた円通寺が、漸く輪王寺宮守澄法親王並に戸田越前守等の斡旋によって、念願が叶った訳である。この文書により、円光院文英尼の観音信仰に対する霊験の喜びが推察される。

円光院と玉淵との接点

円通寺庭園と普門寺庭園及び妙心寺雑華院庭園との関係は、いずれも長方形の地割をもち、さらに配石が東西に長く、地割に応じていることと、共に隠元が関係して

いることである。

文英尼は明暦元年（1655）11月、普門寺に於いて、隠元に請うて、父母の菩提供養を、さらに翌年春には妹の壬生院基子皇太妃を供養する偈を求めている。

当時、普門寺では隠元のために作庭中で、小堀遠州の弟小堀仁右衛門正春が作庭を指導していた。その配下に玉淵坊がいたことは明らかである。

「高槻藩史料」に「前略、其前出来候様小仁右未、被罷上候得共、玉淵被申付、云々。」（郷土高槻叢書第三集、高槻藩永井家文書上）⁷とある。このことから正春不在のときは、玉淵坊がその責任者代理を言いつかっていたことが知られる。「大雲山誌稿」には、「玉淵が普門寺の庭を作ると共に、中略、普門寺の庭は観音補陀洛山の庭といっている。」（日本庭園史大系 21 P.81）⁴

「隔冥記」の慶安元年（1648）七月八日に「八日、中略、小坊公被作庭下賀茂主膳居也、令見之也。妙蓮寺之内庭作之玉淵来、予初逢也。」（日本庭園史大系巻 15 P.77）⁴とあるように、鳳林承章と玉淵との初対面の事が記されている。

従って、文英尼は普門寺に於いて玉淵と個人的に作庭を依頼した可能性が強い。

隠元は明末の騒乱に際し、帰化僧逸然の熱心な請に応じて日本に渡航し、承応三年（1654）七月五日に長崎の興福寺に入った。

偶々、妙心寺退蔵院二世千山の法嗣竺印は、奈良の大仏殿修造の事を発願し、天下を勧進し、長崎の禅林寺に滞在していた。ある日、隠元が竺印を訪問して懇願した。

「何卒、日本に二疊敷の地を賜らば、それに法幢を立て、衆生を度せん。師は大名高家に親みありと聞く。宜しく我為に計り給へ」と、竺印はこれを快諾し、師の千山に相談し、龍安寺の龍溪、禿翁等と計って、隠元の滞留に就いて幕府に出願すべく、竺印は江戸に下ることになった。

そこで竺印は出発前に、京都所司代の板倉周防守の内諾を得、江戸では松平伊豆守、酒井讃岐守など、幕府の要職に説いてその内諾を得た。竺印は単に妙心寺の僧というだけで寺坊がなかった所から、酒井讃岐守から「一寺を求めて然るべし」の一言で、竺印は京都に書を送り、隠元を迎えるため、妙心寺内に一院を建立させた。これが現在の「雑華院」である。（妙心寺史 P.456）³

竺印は雑華院を諸老中に披露した翌年、漸く隠元の滞

留の願いが許可された。一方、龍安寺の龍溪は隠元擁立の中心にならんとし、一条文守の関係から後水尾上皇に近づこうとした。そこで一条文守の関係者の禿翁や獨照のほか円光院文英尼を通じて上皇にお勧め申上げた。

その後、隠元は龍溪の尽力で、高槻普門寺に大叢林を開き、天下の雲衲を集めて、自家の宗風を提唱しつつあった。しかし、幕府は未だ隠元の開法宣伝を公然と許可していなかったため、藩主永井日向守、代官小堀仁右衛門正春に動向を監視させていた。(高槻市史P.593)¹⁷

「雑華院庭園は」「都林泉名勝図会」に此林泉八日蓮宗僧玉淵の作という。中略」(京都名園記中巻P.467)¹⁸と説明している。

従って、円通寺庭園は比叡山を光明山に見たて、山の西阿から、比叡山の西側に仏殿を構えて、本尊に聖観音を祀り、庭園の各所に、流泉洛池を配し、林木薈として茂り、地草柔軟にして、金剛宝座に結跏趺坐する無量の菩薩恭敬し圍繞する光景が表現されている。

石組は「盤陀石」と表示があるところから、補陀洛山の羅漢、塔子、弥陀、靈鷲、妙応、白衣、観音、光熙などの諸峰のほか、仏手岩玄通岩、東方岩、獅子岩、象岩、香炉岩、晝子岩、巫山石、仏牙石、無畏などの奇岩怪石を配して、観音霊場の「補陀洛山」を表現している。

8. 結語

円通寺庭園は、「盤陀境」という庭園を、当山開基円光院文英尼が、明暦年間(1648~1651)に妙蓮寺の玉淵坊に庭園の改修を依頼したものと推察する。庭園の主題を「華嚴経」から「如来の正覺」とし、構想は「無限の求道」、構成は「補陀洛山」として、園内に羅漢、塔子、弥陀、靈鷲、妙応、白衣、観音、光熙その他の諸峰を配して、観音霊場を表現した臨済宗の禅林庭園をつくりあげたものであると考察する。

Summary

1. Purpose and method of study

I found a hint from Banda stone to study a garden vision and a garden time in a Garden of Daihisan Entsui (belonging to Myoshinji sect of Rinza school located in Iwakura - Hataeda - cho, Sakyoku, Kyoto). This study is ideologically

based on the Avatamska Sutra, a history of Myoshinji temple, a chronological record of the Most Reverend Priest Fusho and so on.

2. The history of Entsui temple and an outline of this garden

Priest Tokuo Myoshu built a hermitage called Bodaiin on the historic spot of Myosenji temple located at Hataeda in Rakuhoku. The ex - Emperor Gomizunoo erected a palace called Sanso Hataeda Goten there in 1651 (Keian 4 in Japanese calendar). After that, a Buddhist nun, Enkoin Bunei, a former nurse of Emperor Reigen, received this palace and turned it into a temple called Entsui which belongs to Myoshinji sect of the Rinza school.

This garden is on the eastern side of the Main Hall and oriented from south to north. It covers an area of 660 square meters (about 200 tsubo). It is a flat and dry Japanese garden which makes use of Mt. Hiei as a background garden. At the top of the northeast corner lies a dry waterfall. The garden is landscaped with a gradual slope, which gently declines a westerly direction towards the Main Hall. Garden stones in the Deep Hair moss seem spread out low but standing stones and lying stones join ingeniously.

3. The Gist of the Garden

Entsui Garden is called Bandakyo, which means the garden is made of rugged stones. The founder of this temple, a Buddhist nun, Enkoin Bunei asked Gyokuenbo of Myorenji to repair this garden during the Meireki Era (1648 ~51) I consider that this garden is a Zen garden of Rinza school and that its subject manifests enlightenment of Tathagata from the Avatamska Sutra, its vision, the infinite search after Dharma, its formation, the sacred place of Avalokitesvala (Bodhisattva Compassion) in Mt. Potalaka (living place of Avalokitesvala).

《参考文献》

1. 大正新修大藏經刊行会 大正新修大藏經第九卷、第十卷、大正新修大藏經刊行会 1969
2. 国民文庫刊行会 国訳大藏經 第五卷、第六卷、第七卷 国民文庫刊行会 1918
3. 川上孤山 妙心寺史 思文閣 1975
4. 平久保章 新纂校訂隱元全集 開明書院 1979
5. 禅学大辞典編纂所 禅学大辞典 大修館書店 1985
6. 平久保章 隱元 吉川弘文館 1964
7. 高槻市 郷土高槻叢書第三集 高槻藩永井家文書 高槻市役所 1952
8. 森蘊 小堀遠州 創元社 1974
9. 鎌田茂雄 華嚴經物語 大法輪閣 1991
10. 鎌田茂雄 いのちの探求 日本放送出版協会 1999
11. 木村法孝 華嚴經をよむ 日本放送出版協会 1997
12. 玉城康四郎 永遠の世界観 筑摩書房 1968
13. 久恒秀治 京都名園記第中巻 誠文堂新光社 1968
14. 重森三玲 日本庭園史大系第十五巻、第二十一巻 社会思想社 1973
15. 芳賀登 日本女性人名辞典 日本図書センター 1993
16. 辻善之助 日本仏教史第九巻 岩波書店 1963
17. 高槻市 高槻市史 高槻市役所 1977
18. 竹村俊則 今昔都名所図会5 洛北京都書院 1968
19. 井出時秀 山州名跡志 乾 京都叢書 1935
20. 野村光辰 新撰京都叢書第三巻 臨川書店 1987
21. 太田博太郎 禅寺と石庭 小学館 1967
22. 竹村俊則 日本名所風俗図会8 京都の巻Ⅱ 角川書店 1980

図1 円通寺庭園平面図（京都名園記より）

写真1 円通寺庭園（原色日本の美術より）

図2 普門寺庭園平面図

図3 妙心寺雑華院寺庭園平面図 (京都名園記より)